

# 超未熟児の発達段階に応じた援助

— 1年6か月の入院を必要とした1症例を通して —

南3階：鬼熊千代子

## 1. はじめに

医療の発達により未熟児の救命率が高くなってきている。それと共に、入院期間も長期に渡るようになった。NICU入院により母子分離が余儀なくされた環境の中での発達への援助の必要性が求められている。長期入院後1才6か月で退院になった症例を通し看護婦の関わりについて振り返ってみたので報告する。

## 2. 研究目的

超未熟児で長期入院をした患児との関わりを通して未熟児看護を考える。

## 3. 研究対象及び方法

- 1) 対象 Y君 入院期間 H6. 3. 8～H7. 9. 20  
25W2D 466gにて出生 アプガー1/5  
診断名 超未熟児 RDS PDA 左ソケイヘルニア

### 2) 方法

看護記録により患児の発達状況を知る。またその時点での看護婦の関わりも調べる。

## 4. 結果

体重増加と発達経過は図に示した。

### 第1期 出生から体重2000gを越えるまで

Y君はRDSがあり長期呼吸器管理を必要とし、BPD（肺気管支異形成）を合併した。PDAもあり、水分制限され、H6. 7. 7抜管したものの体重増加不良のため10. 8再び呼吸器管理となった。この頃よりスタッフの声によく反応する様子が伺えた。啼泣時はスキンシップを多くし、声を掛けたり歌を聞かせるように心掛けた。また、両親に玩具を用意していただきクベース内に入れY君に握らせたり音を聞かせた。

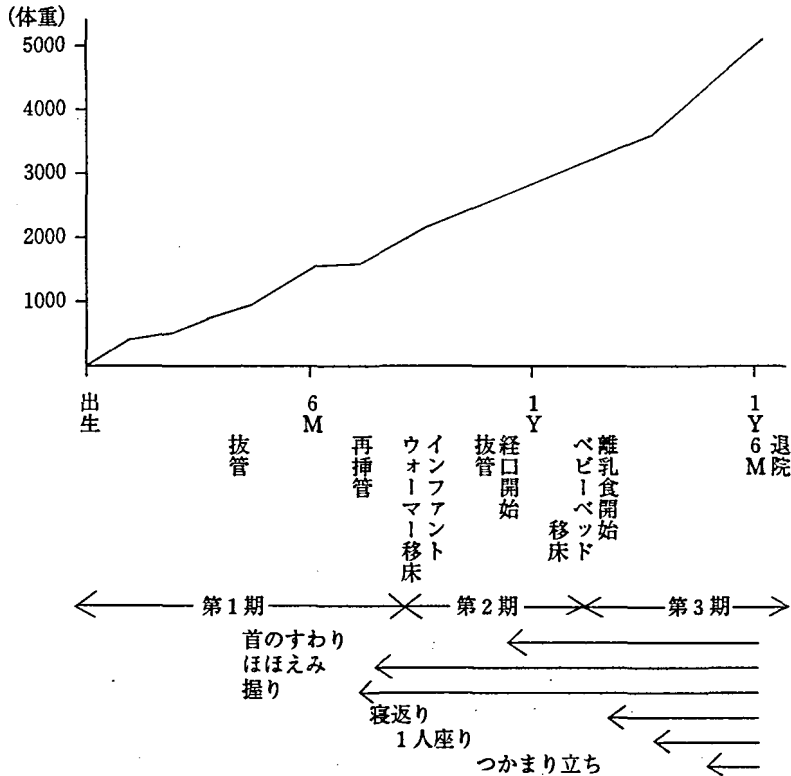
### 第2期 インファントウォーマーからベビーベットに移るまで

12. 3にはようやくBW2000gを越えインファントウォーマーに移床しミュージックテープを聞かせたり、バギングをしながら両親に介抱してもらい親子のスキンシップをとれるようにした。Y君に安心感を与えるためにベビー服も着せた。Y君は呼び掛けに微笑むようになり、玩具にも興味を示し自分で掴むようになった。沐浴はバギングしながら試みたが啼泣激しくチアノーゼ出現したためボールでの殿浴をしながらY君が湯に慣れるようにした。

H7. 1. 30抜管。モニタリングは継続されたが自由に動けるようになり、1才を迎えた頃から動きが活発となった。インファントウォーマーでは落下の恐れあり、新生児室にベビーベット

を置きY君が自由に動けるスペースを作った。

図 Y君の体重の変化と発達経過



### 第3期 ベビーベットに移ってから退院まで

体動が制限されず、広いスペースができ、徐々に動きが活発になった。寝返りも出来るようになった。首のすわりがしっかりするとお座りの練習を積極的にした。毎日どのくらい出来たかを記録に残し援助の継続を図った。ハイハイが出来るように床にY君のためのスペースも日中作った。ベット柵でつかまり立ちの練習も毎日した。また、退院に向け外の環境に慣れさせるために日中の散歩も実施した。最初はびっくりした表情であったが徐々に興味を示すようになった。

言葉に関しては、挿管管理が長かったために発声が出来ず喜怒哀楽の表情がはっきりあっても声が伴わなかった。スタッフはマスク着用で普段は仕事をしているがY君の興味をひき、真似ができるようにマスクをはずして口元を見せるようにした。最初は声を出そうとして呼吸を止めて真っ赤になっていたが次第に自然に声を出し人の注意を引くことを覚えていった。

食事については抜管後経口哺乳開始し、1才2か月にて離乳食を開始し、退院時には離乳食中期を摂取するようになった。

そして1週間母子同室をしたところでBW5340gで無事退院となった。

## 5. 考 察

今まで未熟児室への入院と言うと急性期だけの入室が多かったが、今回Y君のような長期入院児

を経験した。急性期には救命と観察で必死で心に余裕を持った関わりができない。Y君の情緒、精神面への援助に目を向けられるようになり、積極的に関わり始めた時期が良かったのかは疑問である。しかしY君は体が小さいながらも情緒豊かに、また運動発達もできたことは良かった。児の発育に応じた環境の提供をスタッフが同じ様に考え実践した結果と思われる。玩具などの利用も知覚発達にも功を奏した。音楽、声掛けは児の精神安定にプラスになり、スキンシップも安心感を与え、両親に沐浴や授乳に参加していただくことで親子の愛情形勢にも役立ったのではないかと。退院に際しても母から育児への不安は聞かれなかった。

## 6. 終わりに

Y君は超未熟児のために様々な合併症があり経過が長かったがどの児にも言えることは時期に差はあっても発達の段階は同じだということである。成熟児の場合は家庭で自然に刺激を受けながら成長していくが入院児の場合は刺激の欠如による発達の遅れや情緒障害が起こる可能性がある。NICUで働く看護婦に課せられた役割は大きい。今後の看護にもこの経験を生かして行きたい。

また、今回はY君への援助にしぼっての研究であったが未熟児看護は両親への関わりは切り離せない。家族への援助も合わせて考えていきたい。

## 〈参考文献〉

- 1) 庄司 順一：ハイリスク児に対する発達援助，ネオタイルケア，春期増刊：39-43.1995.
- 2) 秦野 悦子：言語・認知の発達とその評価，ネオタイルケア，春期増刊：93-97,1995.